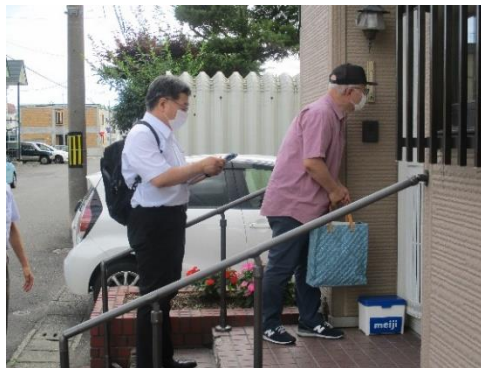


連携した災害時支援をテーマとした第2層協議体／A地域

第2層協議体「啓明・東光・豊岡地区三団体及び道北勤労者医療協会との連携に係る協議」



災害時支援研修会



道北勤労者医療協会と地域住民による個別訪問

[経過]

- ・社会医療法人道北勤労者医療協会一条通病院から「災害時の対応や高齢者の課題など、近隣の地域と連携し取り組みたい」と地域貢献に係る相談を受けたことがきっかけ。

[メンバー]

- ・三地区（啓明・東光・豊岡）三団体（地区市民委員会・地区民生委員児童委員協議会、地区社会福祉協議会）
- ・社会医療法人道北勤労者医療協会一条通病院
- ・旭川市防災安全部防災課
- ・地域包括支援センター
- ・旭川市社会福祉協議会

[目的]

- ・避難行動要支援者名簿を活用した個別避難計画の作成

[協議事項]

- ・避難行動要支援者の要介護、病気及び障害の状態による分類
- ・本協議体の取組の周知を目的とした、各地区の地域住民、福祉事業所及び関係機関を対象とした研修会の開催

（豊岡地区：6月17日、東光地区：8月19日、啓明地区：10月21日）

実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・協議体メンバーの各団体が避難行動要支援者名簿を取得したことにより、それぞれの視点と強みを活かすことができた。
⇒医療機関からのアドバイスにより、要介護度や病気の種類、障害の程度を基に、要支援者を支援の優先度に合わせて4つのグループに分類。地域住民が、優先度の高いグループの要支援者から実態把握に着手。
- ・各地区による取組を隣接する他地区や関係機関がサポートする体制づくりができた。
⇒「災害時支援」は地域住民だけで検討・実施するには負担が少なくないテーマである。しかし、三地区合同で行うことによって、取組が進んでいる地区に係る情報共有や、関係機関のアドバイスやサポートによって、地域住民が前向きに取り組むことができている。

○難しかった点

- ・一度の研修会開催だけでは、各地区全体から本取組について理解や協力を得ることは難しい。
- ・避難行動要支援者の実態把握や個別避難計画の作成は、多大な時間を要する地道な取組。

総括

- ・啓明地区における研修会（10月21日）実施後、三地区合同で当会議を開催し、研修会の振り返りと各地区の進捗状況や課題について共有していく。
- ・令和6年度は、本年度の振り返りの結果を基に「病気や障害に合わせた避難時の支援をテーマとした研修」や、「作成した個別避難計画を基とした避難訓練」の実施などについて検討していきたい。

(共助の居場所づくりに向けた取組) / B地域

(西地区多世代交流この指と～まれ)



【目的】

西地区在住の子どもから高齢者まで安心して住み続けられる地域をつくることを目的に「顔の見える地域づくり」の一環である、昔遊びを通じた多世代交流を実施し西地区の地域福祉活動の推進。

【経過】

西地区市民委員会内の地域住民（子どもから高齢者）を対象とし「めんこ・お手玉・紙相撲・あやとり」などの昔遊び（幅広い層が共通に楽しめる内容）をとおした継続性のある「地域交流」と「居場所づくり」の創出に向け、地域関係者と令和4年12月から定期的に検討を実施。

【開催日時】

令和5年7月29日（土）

【内容】

西地区にあるお寺を会場に、「昔遊び」による交流や、参加者に「カレーライス」・「かき氷」を提供し、地域内に在住している幅広い年代層が共通に安心して楽しめる交流会を開催。

※参加者：45人、地域ボランティア14人、実行委員：13人
行政・包括・社協職員：7人 計79人

実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・これまでのコロナ禍における影響により地域活動に発展することができずメンバーの地域への気持ちが薄れていたが、「地域まちづくり推進事業」をきっかけに、地域住民が主体となって住みやすい西地区について改めて地域内で検討し取組みを進めることができた。
- ・開催場所を工夫し、西地区内にある小学校（日章小、新町小、青雲小）全てを参加対象としたことで、地域内における偏りを軽減し多くの子どもたちに案内をすることができた。
- ・検討段階では、開催における趣旨等を地域住民と繰り返し確認し検討してきたことに加え、交流の場開催において、役割を細分化し各担当ごとに責任者（地域住民）を配置したことで責任感が生まれ地域住民による主体的な活動につながった。
- ・当日は、90代のボランティアさんが幼児や小学生に昔遊びを教え一緒に遊ぶ等、主催者だけではなく地域住民の力を感ずることができる場面が多く見られた。

○難しかった点

- ・実行委員の希望で開催規模が大きくなり、準備期間が長期化した。
- ・3つの小学校を対象としたことで、住まいの地域によっては開催場所まで来ることが難しい子どもがいた。

総括

- ・今回は規模の大きな取組みになったが、地域住民が主体的に活動に取り組んだことで大きな事故やトラブル等もなく「多世代交流」を実施することができた。今後は今回行った活動の経験を活かし、規模を縮小して開催側の負担感（無理のない範囲で）を軽減しながら、各学校区で幅広い世代とのつながりづくりを行っていく方針で検討を進めている。

春光東地区社協と藤星高校が一緒に行うボランティア活動／C地域

C地域 第2層協議体 (春光・春光台圏域)



6.18のウォーキングイベントでの様子

- 令和3年頃に地域包括支援センターの地域ケア推進会議の中でテーマとした『複合課題を持った世帯の発見を目的とした、ボランティア活動による住民同士のつながりづくり』から始まった高校生と地区社会福祉協議会による活動。
- 協議体にてそれぞれの年間予定を共有しながら、地域のイベント時に高校生ボランティアを募り、社協が仲介役となって調整を行うことで活動につなげている。
- 10月には赤い羽根共同募金の活動も一緒に行う予定。

実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・ 令和4年度に個人宅の除草ボランティアを企画したが悪天候で実現せず、除雪ボランティアを2件実施した。
- ・ これまでボランティア活動したくても機会を得られなかった学生に機会を提供できるようになった。
- ・ 地域住民が地域の活動の中で学生ボランティアと交流する機会が得られた。
- ・ 今後、高校の授業の一環で、地域の方々が喜ぶような企画を考えて実施する予定（先生より）。
- ・ 時間をかけて小規模な取り組みを積み重ねていくことで、『連絡体制の整備』『関係者の関係性強化』のほか『地域や事業の課題共有』ができています。

○難しかった点

- ・ 先生が多忙で、連絡調整に時間を要することが多かった。
- ・ 地区社協側が高校生に依頼したいと思うボランティアの内容に幅がなく、活動が限定されてしまう。

総括

(今後の取組に向けた展望など)

- ・ 1年間の事業の流れを確認し、今後の構成メンバーを増やすことや、ボランティアの幅を広げていくことを検討したい。
- ・ 現在はボランティアの調整役を市社協が担っているが、地区社協は地区ボランティアセンター事業の一環として行っているため、調整役を今後誰が担っていくのかについては、検討が必要。

第2層協議体の話し合いから生まれた地域課題解決の取組／D地域

すずかけ夏まつり（神楽・西神楽圏域）



[目的] 地域住民の話し合いから「コロナ禍による人と人の交流の希薄化」という地域課題が挙げられたため、すずかけの会場を活用した夏まつりを実施し、地域住民間での交流・つながりの構築を図ることを目的に開催。

[日時] 令和5年8月26日（土）11時～15時

[対象] 地域住民

[内容] 屋台コーナー、チャリティバザーコーナー、旭川医科大学学生によるお楽しみ体験コーナー、NPO法人ゆいゆいによるお菓子等販売



実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・子ども達を中心に想像以上の人数の地域住民が来場され、子ども、学生、地域住民やボランティアの大人等、多世代が交流することができる場となった。
- ・各ブース低額料金（50円～200円）で提供し、受付にて50円券を販売することで、各ブースでの現金やりとりが不要となり、スムーズに回転したように見受けられた。
- ・すずかけで実施した冬まつりや学習・食事サポート事業に参加した神楽岡小学校児童・保護者が来場しており、「いつもすずかけでの取組を楽しみにしている。」という嬉しい感想をいただいている。

○難しかった点

- ・申込制にしなかったため、どれだけの人数が来場されるか想定が難しく、周知方法や範囲について、悩む部分があった。また、実際に来場した方の内訳（居住地、年代等）までは把握することが出来なかった。

総括

今後もすずかけが利用できる範囲内で、“地域住民の交流・つながりの場”を提供できるよう、企画・運営を進めていきたい。なお、第2層協議体で挙げられた「コロナ禍による人と人との交流の希薄化」という課題は、新型コロナウイルス感染症の分類が5類になったこと等から、地域行事が従来通り開催され始めているため、自然と課題解決に向かうことが予想される。そのため、今後は第2層協議体の中で、再度地域課題を絞り直し、新たな地域課題解決に向けた話し合いを進めていく。